



「^{じかた}地方測量之圖」（京都大学工学部資源工学教室所蔵）

「じ地方測量之圖」かた小考

—— 絵師ははたして北斎か ——

一 はじめに

「当図（口絵写真）は京都大学工学部資源工学教室に所蔵されている江戸末期の木版多色刷の錦絵（大々判、枠なし三七×九七㎢）である。寄贈者は同教室の前身であった採鉱冶金学教室教授の阿



写真1 落款

部正義博士（明治四十・一九〇七年退官）である。その表題が示すとおり、この図は土地の距離や面積を測量する様子を描いており、測量術を図解するために作成されたものであると考えられる。資源工学教室所蔵図は軸装されており、そこに貼付された付箋には明治三十七（一九〇四）年に福岡の江藤正澄という人物（古書画商か）がこの図を所有していたことが記されている。江藤氏はこの図が葛飾北斎によって描かれたものであることを指摘しているが、その根拠は図面左下角の「齡八十九歳 北斎人筆」の落款（写真1）であろう。北斎は三十をこえる画名を用いており、北斎は天保五（一八三四）年から九十歳で亡くなる嘉永二（一八四九）年の間に用いられた最後の画名である。つまり「地方測量之図」は北斎最晩年（嘉永元・一八四八年）の作品ということになる。筆者がそもそも「地方測量之図」に関心を示すようになったのは

山崎 孝史

は、以前勤務していた京都大学文学部地理学教室が一九九二年四月に同大学文学部博物館において「近世の地図と測量術」と題する企画展示を行った際に、この図を展示品として加えたことが契機であった。展示を計画する段階で筆者を含む同教室の教官が、鉢山図の類の地図を借用するという意図の下に同大学工学部資源工学教室を訪問したとき、半ば偶然に同図に目を止めることとなった。原図は軸装されていたので保管状態が良く、ひどい退色もない上、記載されている内容が企画展示のテーマと合致していたので、同図は直ちに展示品リストの中に加えられたのである。筆者の印象として、同図の色彩や構図は見る者に非常に強いインパクトを与えるものであった。結果的に同図は企画展示の主旨を説明する最も中心的な展示棚の中に置かれ、展示会のポスターや展示会図録、学内広報紙の表紙、新聞記事、さらにはテレビ取材の第一画面を飾ることになったのである。

この「地方測量之図」は岩波書店刊『国書総目録』によると、国内では京都大学以外にも国立国会図書館に所蔵されており、いずれも北斎の作品とされている。一九九三年に東京・東武美術館ほかで開催された「大北斎展」にも北斎研究家ピーター・モース (Peter Morse) 氏所蔵の同図が展示されており、^① ライデン国立民族学博物館のイティ・フォラー (Matthi Forrer) 博士編集の画集

『HOKUSAI』も同図 (ホルル・アカデミー・オブ・アーツ所蔵) を収載している。^② このように、一般的には「地方測量之図」は作成年の明かな北斎晩年の作品として国際的にも認知されているのである。^③

北斎が九十歳で亡くなる前年にこのような見事な画を残したとしたら実に驚くべきことであるが、筆者はこの図に限り北斎の作品であるという点には若干の疑問を抱いている。仮に北斎の作品であるとしても、この図を風景画や人物画に代表される彼の他の作品と同列に扱うことに筆者はいささかの抵抗感を覚える。もとより筆者は地理学を専門としており、美術史学の観点からこの図が北斎の作であるか否かを鑑定する能力を全く持ち合わせていないが、土地測量・地図作成技術史上のいくつかの事実からこの図の性格を分析することによって、筆者自身の疑問に答えていくことにしたい。その意味では、真の絵師の特定ということが小稿の目的となる。

① 朝日新聞社ほか編『江戸が生んだ世界の絵師「大北斎展」図版編』朝日新聞社、一九九三年、一五九頁参照。

② Forrer, Matthi ed., *Hokusai: Prints and Drawings*, Prestel, 1991, Print No. 84.

③ このほか中村拓監修『日本古地図大成』講談社、一九七二年の第

四章「国図」のとびらに誓教寺蔵の同図が掲載されている。また、高木菊三郎『日本に於ける地図測量の発達に関する研究』、風間書房、一九六六年の巻頭にも同様の「地方測量之図」が掲載されているが、これは明らかに北斎図の写しである。

二 描かれた事物

まず、同図に記載されている文字と事物を検討してみたい。文字の部分では、右上部に図の表題が記され、長方形の枠内に

地方測量術免許

長谷川善左衛門弘□□

越前福井藩 大橋文五右衛門敏之

肥前大村藩 森莊助英明

同 川原順左衛門忠正

とある。他の「地方測量之図」の記載から判断すると判読できない文字は「門人」である。

さらに図の左上方には二十行にわたる解題があり、この図の作成意図が以下のように記されている（判読できない部分は他の同図によった）。

土地を量りて遠近広狭高低曲直等をくはしう

知るは国家有益の要務にして修營の繩張りを始め

川を^(堀)□り堤を築きなど皆此法によらずといふ事

なしざれば昔より其術を考へ此道に用ふべき器をつくりし人はあまたありし中に故

長谷川翁は関流の正統にして数学の精妙なる事は^(世)□によく知る所にしていふべくもあらず量地の術はあらたに大方儀といふ一つの器をつくりて門人等に授け玉ひしに鳳堂君よくその伝を得て地方の

法を大成し一書をあらはして卷末に量地の術を

載せられてよりこのかたの大方儀大に行はれて此流をくめる人少からず其後

福溪先生に至りても猶

故翁にかはることなく教をうくるものあまたにて其名しるし尽しかたしざる中にも此三人の人々は日夜

つとめ学びて芸術いとくはしう此たび

師より其道の免許をさへうけ給て猶此わざに

□^(お)こたる事なしこれらの故由□^(世)中につたえて人々のはげみにもなれかして土地を量る図をうつし出て初学の人をみちびくたよりとするなん

福溪長谷川先生門人

陸奥盛岡藩

嘉永元年三月

梅村徳兵衛重得

つまり、前半部では土木事業をはじめとして土地を測量する必要性が高まり、関流和算術の流れをくむ「故長谷川翁」なる人物が「大方儀」という測量器具を考案し、「鳳堂君」という彼の門人の書を通して彼の測量術と測量器具が広く流布したと述べられている。そして後半部では「碓溪（長谷川）先生」も「故翁」同様に多くの門人を持ち、中でも「此三人」が精進し今般測量術免許を授かり、これらの事績を土地測量の図の出版によって後学の人々につたえる旨が記されている。

この「故長谷川翁」とは近世後期の江戸の和算家で多くの門人を抱えた長谷川善左衛門寛であり、「碓溪先生」は寛の数学道場を受け継いだ（養）子の弘である。「鳳堂君」とは寛の弟子で天保八（一八三七）年に『算法地方大成』全五巻を著した秋田十七郎義一である。したがって枠内の三名は（解題に署名のある一名も含め）長谷川氏の数学道場の門人で、関流和算術の系統に属する測量術を修得した地方藩士であることが分かる。

一方、図自体の部分には、入り江を囲むいくつかの小丘陵からなる（おそらくは架空の）地域に、城下町を含むいくつかの家屋群（集落）と二十二名の人物が描かれている。家紋入りの陣幕を張り海岸で砲術訓練をしていると見られる五名の人物を除き、いずれの人物も測量作業に従事している。図最前方の七名の人物は

いくつかの測量器具を操作しているが、注意深く見れば、それだけの人物が器具の操作にあたって協同しつつも異なった役割を担っていることが表現されている。

前方右側では二人の人物が「大方儀」を操作している（写真2）。大方儀とは水平角と鉛直角を同時に計測できる、今日いうトランシットのような器具である。筒状の「望遠鏡」をのぞいている一人は彼の前方の目標地点を示す「仮標」を見通していると考えられ、そばにいるもう一人が計器（磁針付き方位盤）から目標の方角を読み取っている。大方儀より小型の「小方儀」を操作する右端の人物は、正確に水平角を計測するために器具を地面に突き立てて両手で垂直に保ち、彼の前方にあると想定される目標を正視している。小方儀は可動式の小方位盤のみからなり、鉛直角を測定する器具は備えられていないが、携行に便利であり、十九世紀初めの伊能忠敬の測量でも最も良く用いられた器具といわれる^①。これらの器具は和製測量器具の最高水準に達しており、真鍮製で簡便かつ精巧であった。これらの人物の中で立っている人物は、「野帳」に測量結果を記録しており、彼の容姿からこの測量隊を指揮する任にある人物であることが窺われる。

図前方左側の三人は、「水杖」の間に張られた「水繩」に沿って「間竿」をあてながら二つの仮標の間の距離を計測していると見



写真2 図右前方の測量者



写真3 図右後方の測量者

られる。生糸や麻糸を主たる素材とする水縄は伸縮するので、水杭の間にまっすぐに張られた水縄の長さを竹材の間竿で計測する方法が採られたのである。

また、図の後方中央から右側に展開する四人の人物のうち、三人が大きく両手を拡げて立っているが(写真3)、彼らの間で仮標(測量目標点)の設定にあたって何らかの信号を交換しているようにも見える。野帳を持った人物が采配を勢い良く振り上げているのもまた、何らかの合図を遠方にいる人物に送っているのである。

これらの人物の装束と旗が以上に解説した役割ごとに色分けされている点にも注意しておきたい。

① 保柳睦美編『伊能忠敬の科学的業績(訂正版)』、古今書院、一九八〇年、三三八―三三九頁。

三 構図の意味

このように、「地方測量之図」が各種測量器具の操作法を図解したものであることは一見してわかるが、全体の構図にも注意しておく必要がある。測量隊はその描かれている様子から、道筋に沿って図前方から後方左側へと移動し、さらに後方右側へと進んでいるように見える。その間、見晴らしの良い小高い丘の上や、

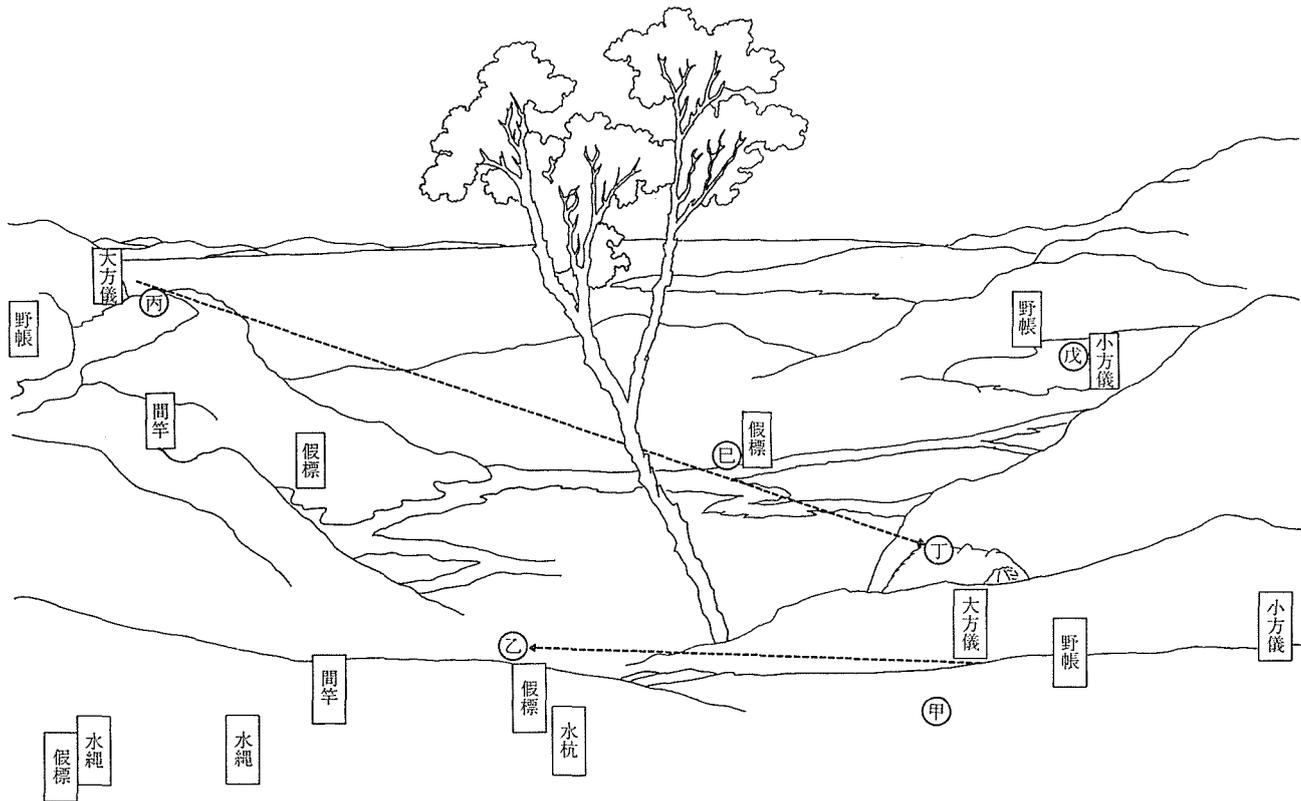


図1 丸付文字の配置と測量者の視線 注) 点線矢印が測量者の視線

見通しの利く平地で、図前方の人物同様に大方儀や小方儀による測量を実施している。ここで見落としてはならないのは、図中の数箇所に甲から巳（己か）までの小さな丸付文字が付されている点である（図1）。

マティ・フォーラー博士による前出画集のキャプションは、これを十干と捉え、一八四八年から四九年にかけての日付を示すデータと解釈しているが、それは全くの誤りである。甲から巳までの符号はいわば序数表示であり、各測量地点と測量目標物の対応関係を示しているのである。つまり、望遠鏡の角度から判断すると、右前方甲点の大方儀が乙点の仮標の位置を計測し、左後方丙点の大方儀が右前方丁点にある家屋を視準している。右後方戊点の小方儀も巳点の仮標の位置を計測していると考えられる。これは当時著された測量術解説書の一般的な地点表示法である。

要するにこの図で表現されているのは、まず見通しの利く場所に測量地点を定め、仮標などで測量目標物（地点）を特定し、大方儀で目標物の方向（水平角）や高度（鉛直角）を測定した上で、各測量地点間の直線距離を水杭・水縄・間竿などで計測し、これらの測定データを野帳に記録する、という一連の土地測量の手順なのである。この手順は当時の和算系測量術の主要な広域測量手法の一つであった「道線法」を想起させる。道線法とは測量

行程の道筋に沿って、道の曲がり角や橋、村の入口など適当地点に次々に測量地点を設けて、順次地点間の方向と距離を測り進んでいく測量法である（図2）。

しかしながら、この道線法では測量地点間の相対的位置関係だけが特定されることになり、山川や集落などの事物の平面位置を特定したり、広範域の測量や地図の作成には必ずしも適当ではない。そこで考案されたのが「交会法」であった。交会法は遠方の

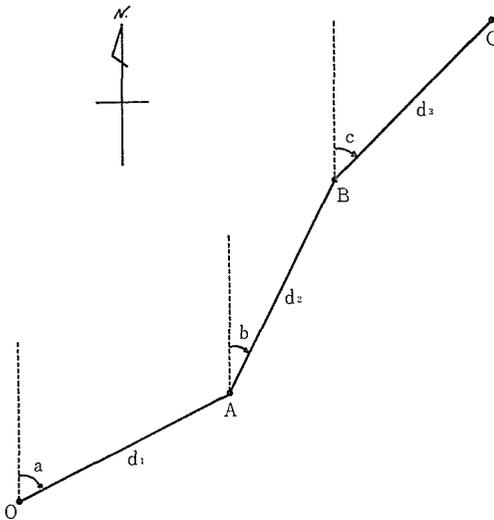


図2 道線法の原理
Oを起点として次の測量地点Aの方位角 a と二点間の距離 d_1 を計測する。以下同様にAからCへ測量を前進させていく。それらのデータに基づき縮図を描く。

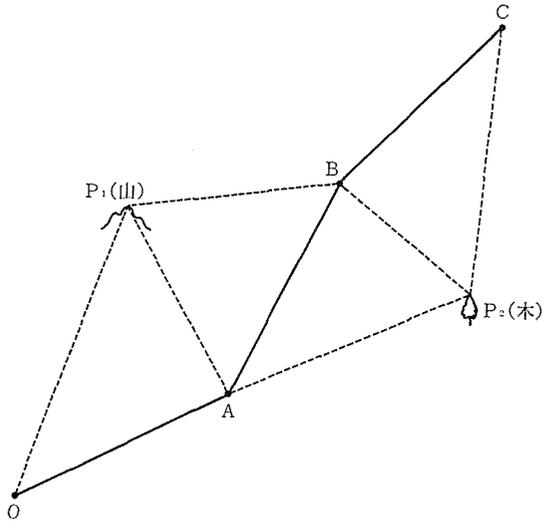


図3 交会法の原理
各測量地点から視準できる目標 P_1 , P_2 の方位角を計測し、それぞれの方向線を図上に引き、交点によって P_1 , P_2 の図上位置を定める。

山の頂などを目標物（つぎあそ「標目的」などと呼ばれる）として、道線法による各測量地点ごとにこの目標物の方向も測定する事によって、目標となる事物の位置ばかりでなく各測量地点の位置をもより正確に計測できる方法である（図3）。起伏・屈曲などの地形的障害で測量地点間の計測が困難な場合でも交会法によってそれを補うことが可能であったのである。

「地方測量之図」では丁点における家屋がそうした目標物の一

とされていると考えられるが、この家屋は一見すると谷あい位置しているの、丙点以外の測量地点からはあまり見通しが良くない^②。想像を逞しくして、もしこの図がこの入り江を囲む地域での正確な地図を作成する方法の解説まで念頭においていたとすれば、各測量地点から見通す事のできる共通の目標物（標目的）が図中に存在するはずである。筆者はこの目標物となりうるのは図の中央に顕然と屹立する一本の木であると考えている。先ほど触れたように、測量隊はこの木を取り巻くように展開しており、甲から巳にいたる地点間の測量にこの木との方向の計測を加えることで、この測量隊は図に描かれた地域一帯の測量を成し遂げることができるのである^③。

もちろん、この図が北斎の手によるものとするれば、誇張された樹木は画に一種のアクセントを与え、構図全体のバランスを保つ作用を持つものとして、北斎の画法によるものと理解できよう^④。しかし、この部分以外はこのままで述べてきたように土地測量のプロセスが実に無駄なく効果的に表現されているので、この図の構図や描写法は土地測量の実態に基づいて緻密に計算された上でのものであると考えざるを得ない。その点でこの図に描かれている事物およびその配置は極めて実用的かつ技術的で、単なる挿絵の次元を越えているのである。

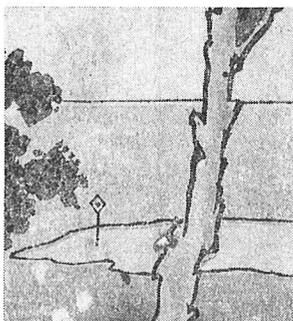


写真4 砲術訓練の光景（左は標的）

この図にはもう一点、図の性格を理解する上で重要な部分がある。それは右最後景にある城郭と入り江および砲術訓練の光景である（写真4）。周知のように、伊能忠敬が全国の測量事業に着手してきたのは、当時幕府が列国との緊張関係から海防上、正確な日本地図の作成を必要としていたからであり、幕末の各藩での測量事業の展開もこうした軍事的要請を背景の一とするものであった。この図に名前の掲げられている何人かの地方藩士も藩命を受けて江戸に出向き、長谷川弘のもとで和

算・測量術の修得に励んだに違いない。つまり、この図は城下の海岸での砲術訓練の光景を敢えて図中に組み込むことによって、さりげなく測量技術修得の国家的・軍事的必要性を見る者に訴えたかったのではなからうか。解題が土地測量を「国家有益の要務」と位置づけるのもそのためである。

① 川村博忠『近世絵図と測量術』、古今書院、一九九二年、一四四—一四五頁。以下、交會法についても同書一四五—一四八頁。

② この家屋は大方儀による地形の高低測量のための目標であると考えられる。

③ 図中の解題が言及している秋田義一編『算法地方大成』第五卷々末（百五十四—百五十六丁）では実際に以上に述べたような広域測量法が解説されている。

④ 『詩哥写真鏡』のシリーズなど、北斎の風景画にはしばしば強調された樹木が描かれ、構図の重要な要素となっている。

⑤ 正確な地図の作成に加え、海上防衛（砲撃）においては敵船までの正確な距離測定が必要となる。

四 絵師ははたして北斎か？

以上のように考えると、「地方測量之図」の性格は一般に知られているような画人北斎の絵とは極めて異質なものであるといえよう。落款上の「応需」の書き込み（写真1）から判るように、たとえこの図が依頼によるものであったとしても、その測量術解説図としての極めて機能的な構図と後景に暗示される幕藩権力の姿は、

浮世絵師として雄大な風景や躍動的な庶民の姿を描いてきた北斎の筆とはたして馴染み合ったのであろうか。測量術という広く一般には伝授されなかつた特殊技術を理解した上で、測量器具を操作する場面の緻密なレイアウトを画面に構成する技量は、晩年の肉筆画を主体とする北斎の壮麗な筆致とどこか不釣り合いな気が筆者はしてならない。

この筆者の違和感をもう少し自己分析してみたい。本来画家は画中の事物のレイアウト（空間的配置）においてその画家としての獨創性を發揮するものと考えれば、北斎はまさしくその獨創性において國際的な名声を築いた画家といえる。しかし、土地測量の解説図といういわばユークリッド空間の正確な計測を主題とする作画は、景観を主観的に誇張する北斎の画風、換言すれば北斎独自の空間表現の原理とは相容れないのではないか^①。これは依頼者が単に作画の題材や対象物を限定する以上に、画家の画家たる所以（自由）を制約あるいは否定することになりかねない。今日に伝えられる北斎のパーソナリティ^②から考えても、「地方測量之図」は北斎の画としては特別な範疇に入らなくてはなるまい。

そこで一つの推理として、筆者はこの図に描かれた測量術及び測量器具についてある程度詳しい、というよりは作図にあたってそれらの知識を修得した別の人物（北斎と関わりを持つ絵師）が

存在し、彼が測量術修得者と共同してこの図を作成したと考えた
い。

幕末に測量術指導書は数多く出版されたが、この図に名前の掲げられている長谷川善左衛門弘、及びその父寛は江戸後期に数多くの和算書を門人名儀で出版したとされる。長谷川弘に關わる測量指導書として出版されたものに嘉永五（一八五二）年刊『量地図説』^③がある。『量地図説』の編者は常陸笠間藩々士、甲斐駒藏広永、校者は同、小野友五郎広胖である。甲斐広永と小野広胖もやはり長谷川弘の門人であり、長谷川は閱者として同書に名を連ねている（図4）。このように同書は長谷川一門の者による図解付きの測量術指導書なのである。

『量地図説』において解説されている測量器具は「正方儀」や「全方儀」と呼ばれる器具であり、それぞれ小方儀と大方儀を構造的に簡略化したような木製器具である。幕末にいかに測量器具が進歩し、改良が進んだといっても、真鍮製の精巧な器具を製作できる職人はごく限られており、地方においては入手可能な素材で容易に作製できる器具の使用が求められていた。『量地図説』はその点を配慮し、簡便な器具の作製法から使用法に至るまでを詳細な設計図と美麗な挿絵（解説図）を添えて丁寧に説明している。

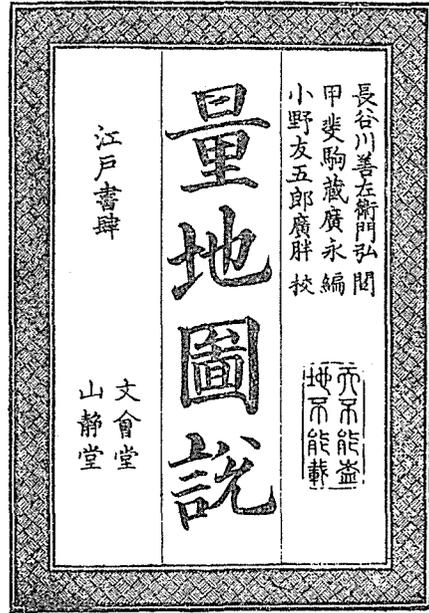


図4 甲斐廣永編『量地圖説』中表紙

ところが、この解説図のいくつかを良く眺めると、「地方測量之図」の描写法と類似する点が見いだされる。たとえば挿絵「町見之図」（図5）に記された解説は遠方の目標物（目的）を定め、甲点から乙点へと至る測量の手順を示している。風景の構成や測量者の描き方など挿絵の絵画的な印象も含めて、この図解の仕方は「地方測量之図」のそれと類似している。

また、『量地図説』下巻末に掲載された「地方測量器略図」（絵師不詳）には「地方測量之図」に描かれたものと寸分違わぬ大方

儀と小方儀が示されている（図6、写真2）。この「地方測量器略図」は江戸の測器師、大野弥三郎規周によって作製・販売された測量器具の一覧表であるが、極めて写實的に描かれている。もしこの図が規周自身のデザイン（仕様）による器具を示しているのであるとすれば、「地方測量之図」の測量隊は大野規周製造の器具を用いていることになる。つまり、「地方測量之図」の絵師は少なくとも大野製の測量器具の仕様と機能、およびその操作法について理解した上でこの図を描いたと判断できる。

解題についての解説で若干触れたが、大方儀の普及に大きな影響を与えたのは、天保八（一八三七）年に秋田義一が『算法地方大成』の第五巻「量地之部」において大方儀の使用法について解説を加えたことであるとされる。この「量地之部」においても測量器具について詳細な図解がなされており、巻末には「測器細工人大野弥三郎規行」との記載がある。この人物はいうまでもなく大野規周その人である。つまり、大野製の測量器具は既に長谷川寛の代において用いられており、長谷川一門の測量術と大野製測量器具とは密接な関わりがあったと考えられる。但し、『算法地方大成』収載の大方儀には、「地方測量之図」および「地方測量器略図」に描かれている大方儀の台座「大方儀台」がなく、台座付きの大方儀は、器具の安定性と精度を高めた後の改良型である



図5 「町見之圖」(甲斐廣永編『量地圖説』上, 十一~十三丁)

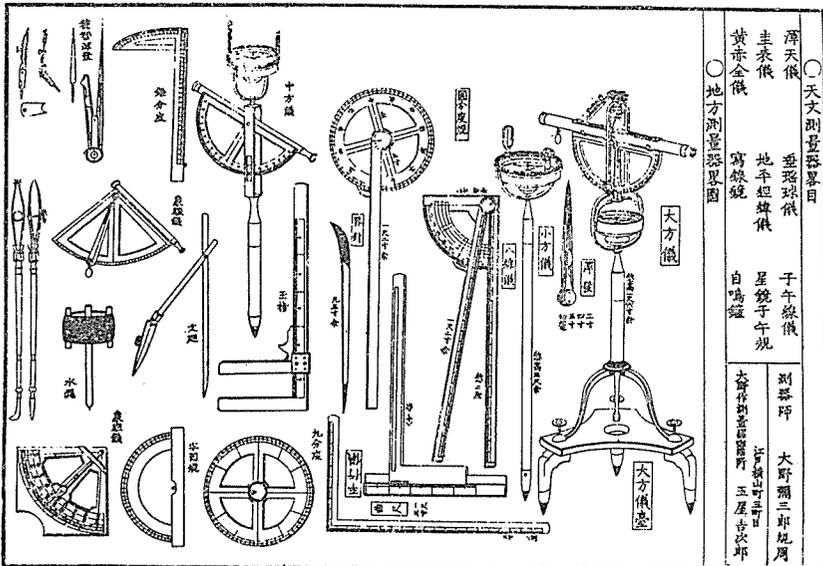


図6 「地方測量器畧圖」（甲斐廣永編『量地圖説』下）

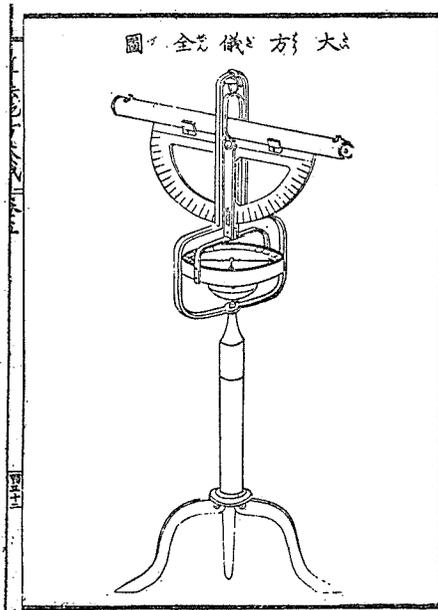


図7 秋田義一編『算法地方大成』中の大方儀（巻五、百三十二丁）

と推定される（図7）。とすれば、「地方測量之図」の絵師は当時の最新仕様の大方儀を（長谷川門下の測量士あるいは大野規周の技術的助言のもとで）描いていたということになる。

このように考えると「地方測量之図」の絵師は単なる文人としての画家ではなく、測量術や測量器具について相応に理解していた人物であると考えざるを得ない。筆者はこの推理の一つの結論として、同図の絵師は後に『量地圖説』の挿絵を手がけた葛飾為斎（一八二一〜一八八〇年）ではないかと考えている（図8）。為

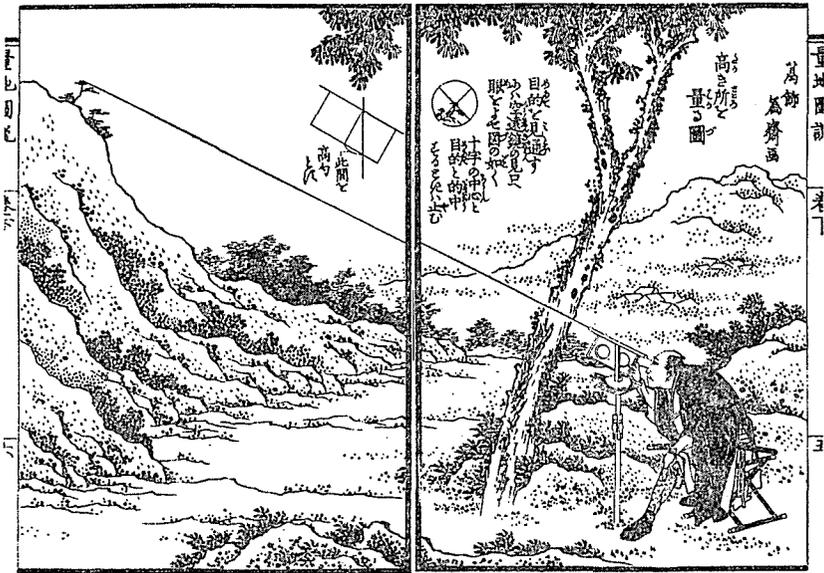


図8 為齋署名入りの挿絵（甲斐廣永編『量地圖説』下、五・六丁）

斎は北斎晩年の弟子であるが、筆者は為齋が描いた図に北斎が署名したと推理したい。つまり、解題に署名のある梅村重得が当時名声を馳せた北斎に作画を依頼したが、先述したように画の構成や描写にあたってかなり制約があり、専門技術的な知識も必要となるので、北斎が当時まだ二十歳代後半であった為齋に作画を委ねたのではなからうか。

為齋による『量地圖説』の挿絵は、風景を巧みにまじえた写実的構図や遠近の描写法、さらには測量者の動作・姿勢などの点において、当時の測量術解説図として卓越している。そこには為齋の絵師としての技量に加えて、測量術に対する理論的・経験的な理解が基盤としてあったものと思われる。筆者は、その基盤こそ「地方測量之図」の作成ではなかったかと推理する。安政四（一八五七）年に刊行された中田龍英著『量地幼学指南』^⑥の挿絵師などは明らかに『量地圖説』の挿絵の何点かを模倣しているほどであるが、その現実味において為齋にはるかに及ばない（図9）。

檀崎宗重氏によると、為齋は「画風北斎に近似して北斎の画と混同する程」といわれる。「地方測量之図」の人物や風景のタッチは確かにその他の北斎の画と良く似ており、筆者のような浮世絵には全くの素人には他の図画との画風上の差異を判定する事は不可能である。但し、同図には、あの北斎の作品から感じとられ

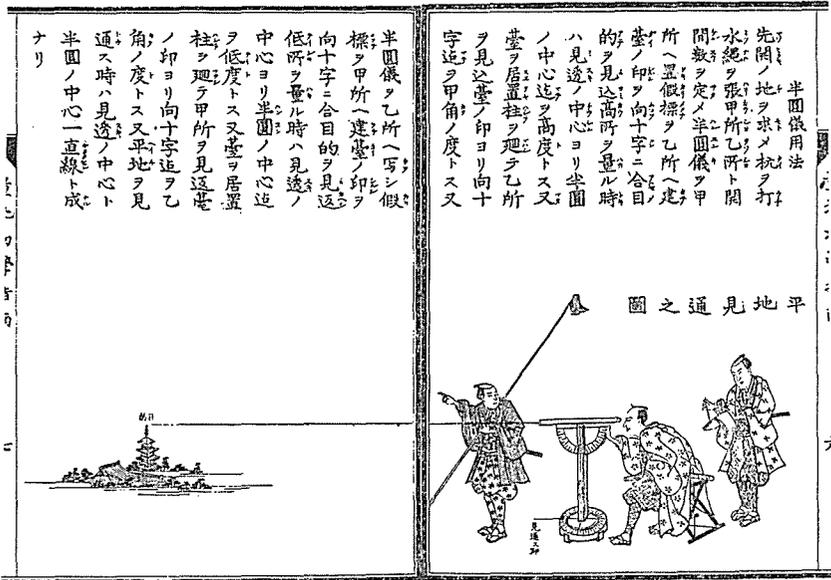


図9 中田龍英著『量地幼學指南』中の挿絵（六・七丁）

る生命感や躍動感がどこかしら欠けているように思えるのは筆者だけであろうか。

- ① 北斎の空間表現の特徴を彼の著名な鳥瞰図「東海道名所一覽」(文政元・一八一八年)に見るならば、そこでは富士山がことさら強調され、江戸から京に至る空間が著しく歪められている。
- ② 飯島半十郎(虚心)『葛飾北斎伝』、蓬樞閣、一八九三年参照。
- ③ 下中弥三郎編『大人名事典六』、平凡社、一九五四年、一五九頁。
- ④ 大矢真一ほか編『江戸科学古典叢書一〇』、恒和出版、一九七八年、所収。
- ⑤ この点については落款や描画法の厳密な検討が必要であるが、吉田漱氏は、北斎晩年の肉筆画に偽作が多く、弟子による北斎落款の使用もあったことを指摘している(吉田漱「北斎是々非々」、『太陽浮世絵シリーズ北斎』、平凡社、一九七五年、一一七―一二〇頁)。

⑥ 前掲④所収。

⑦ 下中弥三郎編『大人名事典二』、平凡社、一九五三年、七一頁。

五 おわりに

端的にいえば、「地方測量之図」の絵師が北斎であるか否かは、美術品の鑑定家にとっては大きな問題かもしれないが、この図の性格を理解する上ではあまり大きな問題ではない。筆者もこの図が北斎によるものではなく、為斎によるものであるという決定的な根拠があるわけではない。しかし、視野を十九世紀前半の江戸に拡大してみれば、そこはまさしく和製(純外来ではないという

意味での) 科学技術と世俗芸術が隆盛を極める舞台であり、それぞれに固有の発展を遂げていたかに見えるこれらの潮流が、この一枚の図に結集している点は看過されるべきではない。

長谷川一門は関流和算・測量術の一大グループであったし、大野規周も父弥五郎と共に、伊能忠敬からの依頼によって測量器具を作製していく過程で、専門の測器師として独立していった。一方、北斎であれ為斎であれ、葛飾派は江戸末期浮世絵界の一大画風を形成した。つまり、同図を理解するための重要な視角の一つとして、作画の背景に江戸末期の日本文化を支えたこれらの人々

の営為と交流を読み取るべきであろう。

その意味で、筆者は北斎の落款を持つ「地方測量之図」の版行を、開国間近い幕末の江戸を舞台とする、科学・技術・芸術それぞれの分野の専門家を巻き込んだ一つの社会的「できごと」として捉えておきたい。

【付記】 本稿の内容の一部は、一九九二年京都大学文学部博物館春季公開講座「日本地図史への招待」(第四回「伊能図から近代図へ」五月三十日)において発表した。

(山口女子大学国際文化学部講師)